29【P2】Ⅱ-263

家伝薬「石田散薬」を検証する

○上村 直樹[1], 寺澤 雅治[2], 椿 孝浩[1], 松岡 寛[1], 志田 保夫[2], 伊奈 郊二[2], 山田 健二[2]([1]都薬北多摩支部,[2]東京薬大薬)

【目的】江戸時代中期から昭和20年代まで、現在の東京都日野市石田にある土方家では、家伝薬である「石田散薬」を打ち身、挫き、腕・腰の痛みなどに効能のある薬として製造し販売していた。この石田散薬を新選組副長の土方歳三は、若いころ葛籠に入れ多摩、甲州、武州と売り歩いていた。この石田散薬は原料としてタデ科の植物であるミゾソバ（別名 牛額草、牛革草）を用い、製法として乾燥、黒焼き、酒の散布、粉砕という工程を経る。また燗酒とともに服用するとされており、その由来などは明らかになっていない。我々は当時行われていた製法についての考察を行い、その効果および成分の検討を行ったので報告する。

【方法】平成１５年７月土用の丑の日に、多摩川の支流浅川で原料のミゾソバを採取した。日陰干しにて約1/10の重量になるまで乾燥させた後、細切し焙烙（代わりに鉄板）上で黒焼きとし酒（古酒）をふりかけ乾かした後薬研にて粉末状とした。また、併せて土鍋を用いた黒焼きも試すこととした。薬理効果確認はラットコットンペレット法でヒト一日一匁を基準として７５ｍｇ／ｋｇを一日２回10日間古酒に懸濁して経口投与した後に肉芽重量を測定した。成分はアルコール抽出後ＨＰＬＣ，ＭＳ等にて検索した。

【結果・考察】製法で「黒焼き」の部分が一子相伝のためか詳細は不明であり、再検討を要する点もあると考えられるが、今回の薬理実験では肉芽生成に影響を与えないという結果に至った。成分検索でミゾソバそのものからはイソラムネチン（分子量316）といったフラボノールが確認出来たが、散薬からは検出されなかった。今後、製法の検討が再度必要であるとともに、製造過程における成分の変化等検討を進めていく必要があると考える。